

NEWSLETTER #88

研究例会報告

- p. 1 第1回関西地区例会報告..... 岡田 正樹
p. 3 第1回関東地区例会報告..... 高橋 聡太

理事会より

- p. 5 年次大会発表申し込みについて..... 安田 昌弘

Information

- p. 6 理事会・委員会活動報告
p. 6 事務局より

2011年度第1回関西地区例会報告

岡田 正樹

輪島裕介氏著『創られた「日本の心」神話 「演歌」をめぐる戦後大衆音楽史』 書評会
日時：6月18日（土）
会場：関西学院大学 大阪梅田キャンパス
輪島裕介氏（大阪大学）
細川周平氏（国際日本文化研究センター）
長崎励朗氏（京都大学大学院博士後期課程・学術振興会特別研究員）

6月18日に、輪島裕介氏の著書『創られた「日本の心」神話 「演歌」をめぐる戦後大衆音楽史』（光文社新書、2010）の書評会が開催された。本著作は「日本人の心」として語られてきた「演歌」が、そのような意味合いを帯びるに到るまでのプロセス、その起源、意味するところを描いたものである。

まずはじめに輪島氏より、執筆にいたる経緯、

動機に関する説明があった。もともとブラジル音楽研究、ワールド・ミュージック研究など非西洋音楽の研究に携わっていたが、そうした中で、あとから近代へと参入した地域の文化的アイデンティティ構築の問題に関心を抱いたと説明した。ブラジルのサンバが、いかにして政治的・社会的文脈において創られたのかを明らかにしている本、エルマノ・ヴィアナ著『ミステリー・オブ・サンバ』を読み、この枠組みを日本の音楽に適用出来るのではないかと考えたという。日本においては、言葉が独り歩きをしているように感じられる「演歌」というものは、何らかのイデオロギー的なものとの繋がりで語られ、ジャンル化されたのではないかと考えたと説明した。また本書の思わぬ反響として、歌謡曲通史としても読まれている点などを挙げた。

続いて、評者の細川周平氏が自身の執筆したコンサート評などを参照しつつ書評を行った。例えばブラジルにおいては「ブラジレイロ」という言葉が歌詞に度々登場することと比較して、演歌の歌詞における「日本」という言葉が登場する頻度や、演歌への自己言及に関する質問や指摘を行った。また、Christine Yano の“Tears of Longing”という演歌についての著作が紹介され、この研究との関連についての質問などがあげられた。

次に、第2番目の評者である長崎励朗氏は、この本から、ポピュラー音楽における〈差異化〉の文化戦略の歴史が見えてくるとした上で、複数の論点を挙げた。例えば、「反知性主義」としての「エンカ」（艶歌/演歌）という見方、長崎氏の携わる労音研究との関連などである。あるいは感じたこととして、時間軸で見た文化の3機能（井上俊）という図式に演歌を当てはめるとどうなるかといった論点が挙げられた。

これらの評の後に、輪島氏による回答があった。演歌の自己言及という点に関して、冠二郎の〈炎〉が紹介され、会場で音源が流された。また、Christine Yano による研究に関し、この研究書では既に、演歌が古臭いタイプのものを

新しくジャンル化したものであることが述べられており、また北中正和も同様の指摘をしているが、しかしここではどのように、そして何故古臭いものが新しくジャンル化されたのかには詳しく触れられていなかった。その点を補強するという形で自身の仕事が位置づけられると回答した。更に Yano の本は演歌が一定のポジションを保っていた最後の時代に書かれており（初版2002年）、J-POP が全てを包摂した現在から見ると、その記述に違和感が残るとも述べた。また反知性主義と反近代主義の関連から演歌を見るということも出来るだろうという回答や、労音と演歌の話題と関連した点では、演歌ジャンル化後に民謡との関係が強調されたことなどから、日本の伝統をめぐる差異化の文化戦略の変遷が見えてくるのではないかと指摘がなされた。

フロア全体の議論でも数多くのコメントや指摘があがり活発な議論が行われた。演歌とブラック・ミュージックの比較研究の可能性に関する指摘、文化の3機能の図式との繋がりから、演歌及びアイドルは教養というより伝統芸能化へ進んでいるのではないかと指摘などが挙げられた。また、演歌は対外的視点を持たず、ドメスティックに「日本的」なるものを構築していった例であることが指摘され、例えば近年のいわゆるクール・ジャパン界隈の物事における外からの視点による真正性の獲得との違いをめぐる議論も起こった。演歌とサウンドについて、演歌と世代について、演歌というジャンルが今後どうなるのかについての議論も行われた。

本例会の様子は、試験的に、映像・音声の生中継や録音・録画が出来るインターネット上のサービスである Ustream を通じて生中継された。コンスタントに10人前後の視聴者が視聴していたとのことで、この数字は比較的多い方である。中継をするとなると、著作権隣接権の関係上、音源の扱いには注意が必要になるなどといった影響もあり、今回も〈炎〉を流す際には中継の音声をオフにした。また Ustream にはコメント欄・

チャット欄があり、リアルタイムでその反応を確認できるが、仮に今後も生中継をする機会などがあれば、視聴者のコメントをいかに進行や議論へと反映させるかということも、重要となってくる場合があるのかもしれない。

(岡田正樹 大阪市立大学大学院)

2011 年度第 1 回関東地区例会報告

高橋 聡太

日時：2011 年 6 月 4 日（土）

会場：東京藝術大学北千住キャンパス

修士論文発表会

今回の関東地区例会では、学部生 1 名による研究発表と、今年 3 月に修士課程を修了した 5 名の修士論文発表が行われた。本来は 3 月 13 日に開催される予定だったが、先の東日本大震災の影響で日程を 6 月 4 日まで延期。発表の持ち時間は一人 30 分で、質疑応答に 15 分が当てられた。司会は加藤綾子会員（東京大学）による。

1. 武居健太（東京工科大学メディア学部）

CGM とコンテンツ・ホルダーとの関係性の変化に関する研究—YouTube を事例として—

音楽などコンテンツの流通にとって、これまでコンテンツ・ホルダーとマス・メディアとは良好な共犯関係を展開してきた。しかし、YouTube に代表される動画投稿サイトのような CGM と呼ばれる新しいメディアの出現に対して、コンテンツ・ホルダーはどのように対応してきたのか。著作権保護の観点から CGM を規制してきた流れが一転して軟化した要因の解明を目的として、武居氏は日本経済新聞社の記事を対象

に、キーワードに沿った記事の分類などの定量調査と、記事内に見られる発言を分析する定性調査とを行った。それによると、CGM に対するコンテンツ・ホルダーの対応が規制から提携へと変化したのは 2007 年～2008 年のことであり、YouTube 側からコンテンツ・ホルダーへのメリット提供が行われ、CGM の活用による利益が権利者にもたらされるようになったことが、関係性の変化を引き起こした要因であることが明らかにされた。

質疑では、スマートにまとまった考察が高く評価される一方で、分析対象を一新聞社だけでなく複数の媒体に拡大することの必要性や、産業側だけでなくユーザー側での対応変化を調査することの重要性が指摘されていた。

2. 松本淳（東京大学大学院）

デジタルシフトが生む映像コンテンツの新しい消費態様と評価指標—バリューチェーンのデジタル化がアニメにもたらす影響から

インターネットと映像をキーワードにした研究発表が続く。第二報告者の松本淳氏の報告は、メディア環境の激変が日本のコンテンツビジネスに突きつけた問題について、アニメ作品を通じて考察したものだ。発表では、これまでコンテンツビジネスの大前提とされていたウィンドウリングモデルの限界について言及。映画／ビデオ／テレビといった各ウィンドウの区分がコンテンツ流通のデジタル化によって融解したことを指摘し、爆発的に拡大したネットワーク外部性の影響を指数化するための新モデルを仮説として提示した。さらに、オルタナティブとなる指標の有効性を検証するため、ウェブを駆使して斬新なウィンドウ展開を行ったアニメ「イヴの時間」の事例を紹介。視聴動向調査や関係者への取材成果により、コンテンツ産業におけるウィンドウとしてのインターネットの重要生が浮き彫りとなった。

新時代のコンテンツ経済圏の複雑なメカニズムを解きほぐす野心的な研究報告は例会参加者の中で大きな反響を呼び、発表後の質疑応答では、著作権保護水準、新たなウィンドウイングモデルにおけるユーザー概念、ネットワーク外部性の評価基準といった、ネット以降のコンテンツビジネスを取り巻く容易には捉えがたい諸要素についての鋭いコメントが寄せられていた。

3. アルニ クリスチャンソン（東京藝術大学大学院）

日本における Dubstep—音楽シーンに関する考察—

ここまでコンテンツの流通についてのマクロ視点による研究発表が続いたが、クリスチャンソン氏の発表は「ダブステップ」と呼ばれるクラブミュージックの—ジャンルを対象とした、ミクロな視点によるものであった。氏はその日本におけるローカル化と定着の過程を、綿密な民族誌的調査で得られたデータをもとに描写した。こうしたクラブカルチャーの理論的考察には、これまでサブカルチャー理論が主に用いられてきたが、ローカル化という契機を含みつつ捉えるためにはそれだけでは不足だとクリスチャンソン氏は述べる。そのために「ローカルシーン」と「ローカルジャンル」という新たな認識枠組みが提示され、先行研究として行われている日本におけるヒップホップの研究と比較しつつ、日本でのダブステップというローカルシーンの形成過程が詳細に説明された。

クリスチャンソン氏がダブステップの特性を説明する中で、インターネットの存在がシーンにとって不可欠なものである指摘がなされ、質疑ではそれを軸に活発な意見が交わされた。ネットに依拠しながらも現場に真正性を見出す特徴が見られるという調査結果に対する指摘や、インターネットを介した発信にはナショナルな

心性がどう表れるのかといった疑問など、新しい文化実践ならではの現象について議論が交わされた。

4. 佐藤岳晶（東京藝術大学大学院）

失われゆく音楽の多様性・多言語性を求めて—グローバル時代の地歌箏曲伝承のフィールドワークから—

続く佐藤岳晶氏の研究発表も対象領域へのフィールドワークを研究の一つの柱とするものだ。佐藤氏の問題提起は、西洋音楽が普遍的なものとして世界に浸透することで音楽文化の多様性が失われつつある状況を、英語の世界的覇権とマイナー言語が失われゆくさまとのアナロジーのもとに言語学の知見を援用しながら捉え、批判的に考察しようとするものであった。自ら地歌箏曲という伝統邦楽のフィールドとして入り込み、演奏技法や音楽言語を学ぶ一方で、研究の枠にとどまらない実践としての創作活動も行っている。そうした実地で得られた知識を、ポストコロニアル理論にまでいたる幅広い用語で補強した、非常に意義深いものであった。

佐藤氏の西洋音楽言語を基盤とした議論に対し、質疑ではポピュラー音楽学会らしい反応が様々にみられた。ポピュラー音楽の場ではそもそも音楽言語や演奏形態の多様性が広く認められているという観点から、「多様性の危機」というテーゼ自体に対する疑義や、音階などの西洋音楽言語を用いることの是非を指摘するものなど、非常に活発な議論がなされていた。

5. 團康晃（東京大学大学院）

『社会としての学校』におけるメンバーシップ—インタビューと参与観察に見るカテゴリーの使用を題材に

クリスチャンソン・佐藤の両氏に続いて、團

康晃氏も地道なフィールドワークから得られた貴重な知見を発表したが、ごく一般的な中学校をフィールドとしたその研究成果は、比較的マイナーな特定の音楽シーンに着目した前二者と好対照をなすものだった。團氏は、教育支援ボランティアとして九州の公立中学校に通い、ある学年の生徒と教師を対象とした参与観察を実施。「学校という社会」がどのように描かれていくのかをエスノメソドロジーの手法を用いて分析した。今回の発表では修士論文の概要を説明した上で、ポピュラー音楽が文化的カテゴリーとして執行されるケースを紹介。アンケート調査の結果から導き出された中学生たちの音楽観をあきらかにした上で、校内放送でアニメソングを流すことへの是非をめぐる女子学生へのインタビューを手がかりに、音楽ジャンルと中学生のアイデンティティの結びつきを論じた。

豊富なフィールド経験に裏打ちされた貴重な研究は強い関心を集め、質疑では様々なリアクションを呼んだ。事例から導かれる一般的な枠組についてのより踏み込んだ考察を求める声がかかる一方、発表では主に具体的な事例の分析に時間が割かれていたため学校生活全体における音楽の位置づけがやや見えにくかったとの指摘もされていた。

6. 原島大輔（東京大学大学院）

コンピュータ音楽に媒介された相互作用とライブ

フィールド調査に基づく研究報告から一転し、今回の修士論文発表会を締めくくる原島大輔氏の発表は、深淵かつ広範な理論的探求を通じてコンピュータ音楽の相互作用とライブ性について考察するものであった。報告では、コンピュータを用いた演奏がライブ性の欠如と戦いながら発展してきた経緯をあきらかにするため、1957年に世界初のコンピュータ音響合成実験を行ったベル研究所の事例から、リアルタイムな

演奏を可能にしたラップトップPC普及後の現在に至るまでの歴史的経緯を俯瞰的に総括。その上で、オートポイエシス論、サイバネティクス、パフォーマンス美学など幅広い分野の理論を援用しながら、ラップトップ・パフォーマンスにおいて現れるライブ性を、パフォーマンスをとりまく環境の制約という観点から精緻化し、メディア＝環境の自律性とライブ性の関係を論じていった。

質疑応答では、実際の現場でライブ性を形成するパフォーマーとオーディエンスの役割や、そのどちらにも属さないコンピュータ音楽のシステム開発者たちがインタラクティブ性を追求してきたことへの言及や、修士論文で打ち立てられた理論のより具体的な応用可能性についての質問が寄せられていた。

（高橋聡太 東京藝術大学大学院）

年次大会発表申し込みについて

研究活動担当理事 安田 昌弘

第23回日本ポピュラー音楽学会年次大会を次の通り開催します。

日程：2011年12月10日（土）11日（日）

会場：大阪市立大学杉本キャンパス

大会実行委員長：増田聡

つきましては、個人研究発表とワークショップの企画案を募集します。

発表を希望される方は JASPM のホームページ

<http://www.jaspm.jp/conf2011.html>

より発表申込書（ワードファイル）をダウンロード

ードし、必要事項を記載して、下記アドレスまでメール添付で送信してください。

- ・申込書には「個人発表用」と「ワークショップ用」の別があります。
- ・郵送等による申込を希望される方は、下記「問い合わせ先」までおたずねください。

受付締切後に研究活動委員会で発表内容を吟味し、発表に関するお知らせを個別に連絡させていただきます。

◎申込要項

受付締切 2011年7月25日(月)中に必着のこと

7月28日(木)を過ぎても受領の連絡がない場合は、問い合わせ先にご連絡いただくようお願いいたします。

◎送付・問い合わせ先

- ・研究活動委員会 安田昌弘
- ・連絡先 yasuda@kyoto-seika.ac.jp
- ・tel 075-702-5288 (研究室直通)
- ・fax 075-722-0838 (人文学部安田宛と明記してください)

◎発表時間は例年通りです。

- ・個人発表：30分(発表20分+質疑10分)
- ・ワークショップ：3時間

◎ワークショップ企画案について

ワークショップでは、一つのテーマについて、多角的に提起される問題について、フロアとパネルの間で時間をかけて議論することができます。ご自分の研究フィールドの意義を知らしめる絶好の場だと思いますので、ふるってご参加ください。

パネルには通常、発表者(問題提起者=3名ほ

ど)が並びます。非会員の方も問題提起者になることができますが、謝礼や交通費は支払われません。

なおワークショップでは発表者以外に、発表後の討議を進める「討論者」一名を置きます。討論者の選択については、後日研究活動委員会より相談させていただきます。

◆information◆

理事会・委員会活動報告

■理事会

2011年第1回理事会(持ち回り)

3月4日 議案送付

3月11日 回答〆切

議題1 新入会員の承認

2011年第2回理事会

6月19日 於大阪市立大学杉本キャンパス

議題1 新入会員の承認

議題2 各委員会報告(研究活動、編集、広報、財務会計、国際、事務局)

議題3 前回理事会議事録案の承認問題について

議題4 IASPM日本支部の会計分離問題について

議題5 学会および各部局の所在地の問題について

議題6 選挙規則の改正について

議題7 会員情報管理データベースの改善策について

事務局より

1. 原稿募集

JASPM ニュースレターは、会員からの自発的な寄稿を中心に構成しています。何らかのかたちで JASPM の活動やポピュラー音楽研究にかかわるものであれば歓迎します。字数の厳密な規定はありませんが、紙面の制約から 1000 字から 3000 字程度が望ましいです。MS-Word または Text ファイル形式にて、メール添付でご投稿ください。ただし、原稿料はありません。

また、自著論文・著書など、会員の皆さんのアウトプットについてもお知らせ下さい。紙面で随時告知します。こちらはポピュラー音楽研究に限定しません。いずれも編集担当の判断で適当に削ることがありますのであらかじめご承知おきください。

次号 (89 号) は 2011 年 8 月発行予定です。原稿締切は 2011 年 7 月 30 日とします。また次々号 (90 号) は 2011 年 11 月発行予定です。原稿締切は 2011 年 10 月 30 日とします。

2011 年より、ニュースレター編集は事務局から広報担当理事の所轄へと移行いたしました。投稿原稿の送り先は JASPM 広報ニュースレター担当 (nl@jaspm.jp) ですので、お間違えなきようご注意ください。ニュースレター編集に関する連絡も上記にお願いいたします。

2. 住所・所属の変更届と退会について

住所や所属、およびメールアドレスに変更があった場合、また退会のご連絡は、できるだけ早く学会事務局 (jimu@jaspm.jp) まで E メールまたは郵便でお知らせください。

現在、学会からの送付物は、ヤマト運輸の「メール便」サービスを利用しております。このため、郵政公社に転送通知を出されていても、事務局にお届けがなければ住所不明扱いとなります。ご連絡がない場合、学会誌ほかの送付物がお手元に届かないなどのご迷惑をおかけするおそれがございます。

例会などのお知らせは E メールにて行なっております。メールアドレスの変更についても、

速やかなご連絡を事務局までお願いいたします。

JASPM NEWSLETTER 第 88 号

(vol. 23 no.2)

2011 年 7 月 1 日発行

発行：日本ポピュラー音楽学会 (JASPM)

会長 佐藤良明

理事 大和田俊之・小川博司・久野陽一・谷口文和・東谷護・増田聡・南田勝也・毛利嘉孝・安田昌弘

学会事務局：

〒558-8585 大阪市住吉区杉本 3-3-138

大阪市立大学大学院文学研究科 増田聡研究室

jimu@jaspm.jp (事務一般)

nl@jaspm.jp (ニュースレター関係)

http://www.jaspm.jp

振替：

00160-3-412057 日本ポピュラー音楽学会

編集：松井領明